

## 第2回滋賀県公立大学法人評価委員会開催結果（概要）

日 時 平成25年7月22日（月）14:00～16:00

場 所 県庁本館4階 4-A会議室

【出席委員】 佐和委員（委員長）、奥田委員、郷委員、古川委員

【欠席委員】 坂口委員

【事務局】 金山課長、他関係職員

【県立大学】 大田理事長（学長）、川口副理事長、菊池理事、仁連理事、布野理事  
藤川事務局次長、他関係職員

・開会

【議 題】

### 1. 平成24事業年度に係る業務の実績に関する評価について

（委員長）議題1「平成24事業年度に係る業務の実績に関する評価」について、県立大学から大学監事による監査結果報告書の提出がありましたので、大学から説明をお願いします。

・監事監査報告書について、県立大学より説明

（委員長）ありがとうございました。それでは、この議題1については、まずは前回の委員会に引き続き、大学に対しての質疑等を行いたいと思います。前は、大学からの説明を聞いてすぐの質問ということでしたが、改めて資料をご覧いただいた上で、項目別に質問していただいても結構ですし、ただいま説明のありました監事監査報告書についても結構ですので、お願いします。

（委員）監事監査報告書は第1期の評価委員会にも出していただいているか。覚えていなくて申し訳ないが。

（大学）出している。

（委員）拝見して大事なことがいくつか書かれているなと思った。評価委員会だけでは分からないことがよく書かれていることが分かった。ひとつお聞きしたいが、監事は役員会には毎月二度出ているが、教育研究評議会には1回出ただけで、経営協議会やその他の会議には出たおらず書面を見て判断されたということですね。

(大学) はい。

(委員) 国立大学を見ていると、経営協議会には監事さんがオブザーバーとして出席されていることが多いと思う。役員会と違って、経営協議会は外部の方に入ってもらっている唯一の場ですね。半数の方は外部の方。法人化して経営協議会ができたことは、外の方が客観的にいろいろな意見されるというのは、今まで閉じた世界だった国公立大学にとって非常に意味を持っていると思う。いろいろな大学で経営協議会の意見を真摯に受け止めて、毎回議事録をきちんと取って、次の会議で反映させている例が結構多い。国立大学の法人評価では、経営協議会をどのように活かしているか、議事録を公開しているか等について、評価の対象にしているところもある。今日の評価の中身にも関わってくるのだが、経営協議会でどんな議論をされているか、計画に書いてないので評価のしようがないが、監事さんの報告を見させていただいて経営協議会をどのように活かしておられるか聞かせていただきたい。大きなことになるが、経営協議会のあり方のようなものか。それから、監事さんがいろいろと取り上げられている宿題については、来年度の計画に活かされるのですね。ただ、年度計画は大学で作られるもので、評価委員会には出てこないものですね。監事監査報告書を見させていただいて、いろいろと思ったところである。すぐにお答えいただけるものではないかもしれないが、大きな問題があるように思う。

(大学) 我々の大学では、教育研究評議会、経営協議会、役員会いずれも外部委員をお願いしている。評議会では、なかなか辛口の意見を言っていただき、全学キャンパスは全面禁煙にせよなど、いつも非常に厳しいことを言っていただいている。経営協議会も然りで外部の委員が半数、役員会も然りである。監事さんお二人に関しては、役員会には必ず毎回出ていただいているし、学内の会議にはいずれに出ていただいてもいいように案内を出している。お一人は公認会計士で、もう一人は弁護士であり、なかなかそこまではというところがある。意見は次期計画には反映しているし、それから認証評価では外部からの意見をどのように反映しているか具体的な例を挙げて説明しなさいという項目がある。

(大学) 法人化してからこういうかたちになっている。監事さんは多忙であるが、今いただいた意見について監事さんと相談して、特に他の大学の例を参考にしながら経営協議会について相談してみたい。

(委員長) 私の知る限りでは、国立大学法人のほとんどの場合、経営協議会にも教育研究評議会にも監事は出席している。というのは、役員会は既に決まったことを最終的に決める場であり、それまでの経営協議会や教育研究評議会でも議論がほとんど尽くされてしまっている場合が多い。そういうわけで、監事さんに出ていただく場としては、どういうプロセスを経て決まったのかを見てもらうために経営協議会や教育研究評議会にも出席いただくことにしている。大部分の大学では2名の監事で、1人は大学の教員経験者、1人は会計士という組み合わせが最も多いのではないかと。それから、大学によって意思決定のプロセスはいろいろ違うが、例えば京都大学では部局長会議というものがあって侃侃諤諤の議論がされるが、そこにも監事が出席していると聞いている。滋賀大学の場合は、部局長会議にあたるものとして企画調整

会議というものがある。これは毎週開催するもので、非常勤の監事に毎週出ていただくこともできないので、監査室長が出席して議論の経緯等を必要に応じて監事に報告するなど、意思決定のプロセスを可能な限り監事に伝えるように努めている。

(大学) 監事は県が任命しているので、県とも相談しながら監事さんの役割を大学で検討していきたい。

(委員長) 業務というと財務的な面があるかもしれないが、特に教育研究について見識のある批判的な監査をいただくには、教育研究の経験者が一人入っていただくのが望ましいと思う。

(事務局) ただいまの意見も参考にしながら、また他大学の状況も確認して、次回の監事の選任のときに検討したい。

(委員長) それでは、続いて資料について事務局から説明をお願いします。

・項目別評価事項：論点整理資料等について、事務局より説明

(委員長) ありがとうございます。続いて、県立大学から補足等がありましたらお願いします。

(大学) 大学と評価委員会で評価が分かれるものにコメントがついている。評価の食い違いがどこから来ているかという、2種類ある。ひとつは年度計画に対して実際どれだけやってきたかとする量的な判断をするところで食い違いがあるもの、これが最初の3つ、2番、5番、63番がそれに該当すると思う。一方、最後のコメントは年度計画が元々多少甘いのではないかということで、年度計画のところに言及されているので、量的な判断というよりむしろ観点が違っており、前の3つとは違う判断であると思っている。最後の70番目の年度計画のレベルを今ここで問題にされると、他のところでもそういうところはあると思われるので、これはちょっと別に考えておけばよいと思う。2つの判断が違うものを含んでいるのは、これでよいか。

(委員長) 大学の評価と評価委員会の評価が異なっているものが4つありますが、順番に見ていきましょうか。まず2番。大学のⅢという自己評価に対して評価委員会の案はⅣとなっていますが、いかがでしょうか。

(大学) 7月に入試の募集要項を発表するが、その中に書き込んでいる。

(委員長) 来年度の新生からか。

(大学) 28年度新生から実施。入試の変更は、だいたい2年前から周知する。内容は、センター入試を利用する推薦入試をしようとするもの。

(委員長) 周知のために2年前からか。

(大学) 受験生にとって見れば、推薦入試は今までセンター入試は要らなかったもので、それを入れるということは、ハードルを少し上げることとなる。そういうものは2年前に、逆に定員を増やすだとか科目を減らすなど受験生の負担が減るほうは1年前でよいということ。

(委員長) センター試験の点数も選考に入れるということですね。

(大学) 作り方としては、どういう人材を養成するか人材養成を先に検討して、それに基づいてどういう学生を受け入れるか受入れ方針を決めて、そういう結果を経て共通的な学力チェックを入れましょうということになった。ということを決めて公表する準備まで行ったということ。

(委員長) センター入試は1月に行われる。通常、推薦入試の合格発表は早い時期だが、推薦入試の合格者の発表がかなりずれ込むことになるのか。

(大学) そうということ。

(大学) 合格発表は2月の初め頃になる。

(委員長) こういうことも考えられる。例えば、推薦入試の応募者の中から仮合格者を決めて、それでセンター試験の結果を見た上で確定するということですか。

(大学) 面接は早くやって、最後の発表だけがセンター試験の結果を見て遅くなる。これも学科によって違い、約半数の学科がセンター入試を利用して、半数の学科が今までどおりの推薦入試をいうかたちになる。

(委員) 質問してよろしいですか。7月に公表するとあるが、もう公表したのか。

(大学) ホームページで公表している。

(委員) これはⅣということなのか。計画された以上にされたということなのか。Ⅲでもいいような気がするが。

(委員長) どういう点が上回っているのか。

(事務局) 計画では「改善点を明らかにする」とあるが、明らかになった改善点を踏まえて新しい特別選抜の方法を固めて公表できるところまで準備されており、内容とスピードの部分で年度計画の内容を上回って実施されたのではないかと判断してⅣとさせていただいた。

(委員長) 一言で言えば、年度計画では検討するとは書かれていないが、実際は速やかに検討をすませて新しい制度を実施するところまで持って行ったということですね。

(委員) それでいいと思う。見直しだけに終わらず、実際に実施されたのだから。

(委員長) 特別選抜は何名ぐらい。

(大学) 定員の2割。

(委員) 各学科とも。

(大学) はい。各学部学科とも。

(委員長) そのうちどれぐらいにセンター入試を必須にするのか。

(大学) 13学科のうちの7学科。

(委員長) 7つの学科は全員がセンター試験を受けるのか。

(大学) 残りは従来どおり。

(委員) 今のお話しでよく分かった。検討以上に進められたということなので、Ⅳでよろしいかと思う。

(委員長) それでは2番については、ⅢからⅣにするということにする。続いては、5番目です。これについて、大学のⅢという自己評価に対して評価委員会の案はⅡとなっているが、いかがでしょうか。

(大学) これは科目ごとの成績評価基準について、ループリックを使ってやっていくことを決めて、その作業を去年からやり始めたのだが、何せ科目数が千いくつあるので全部やるのはなかなかできておらず、今作業中である。やり方を明確にしたということはあるのだが、公表するまでにはまだ至っていない。

(大学) 単位認定基準は今でも書いている。例えば、出席点が何点、今は、出席点はJ A B E Eの関係でダメなので入れていないが、レポートが何点、中間試験が何点、期末試験が何点、宿題が何点というように出しているが、ループリックは全く別のもので、この科目で何々をできるようにになった、何々について理解するようになった等があり、それについて評価をしていくということなので、非常に厳しくこの科目でどれだけの能力が伸びたかというのをチェックするというのがループリック。これは現在盛んに使われているが、専任の先生は何とかやってくれるが非常勤の先生まで含めて全部やるとなると大変なので、たぶん大学の方で作

ったもので非常勤の先生にお願いするということになるだろう。教育のPDCAを回していくことを考えると、この基準でやってどのような成績分布で良かったかチェックを入れることとなり、そのチェックの入れ方によりカリキュラム方針との照らし合わせをやることになる。おそらく数年たつと少しずつ変えていきながらやらざるを得ないと思われるので、1回作っただけでそのままという性質のものではないと思う。まず最初は、学生も分かるかたちで作らしようということをはじめたところである。

(大学) 今年いっぱいで作って、あと教務システムが更新の予定なので、そこに評価基準を書く欄を作って教員に入れてもらおうと思っている。それができるまでは、紙ベースで授業開始前に学生に配ってもらうことを考えている。

(委員長) IIでもやむを得ないか。

(大学) 公表していないという意味では仕方ないと思うが、やり方を明確にしたという意味からいえばそのやり方で進んでいくのでいずれは完成する。

(委員長) 25年度は明確にするということですね。

(大学) 計画自体がしんどい計画だった。

(委員長) よろしゅうございますか。では次に63番に移ります。これについて、大学のIVという自己評価に対して評価委員会の案はⅢとなっていますがいかがでしょうか。

(委員長) パーセントでこれだけ削減したといえとわかりやすいのだが。

(大学) 夏の7、8、9の3ヶ月間で、平成22年度は228万キロワットアワー、平成24年度は195万キロワットアワーと10数パーセント減らしている。ところが電気料金は原油価格の高騰分を上乗せする制度があり、結果として257万8千円の削減となった。これは自然にそうなったわけではなく、申し上げたいのはピークカットということで、ピーク容量を下げたら関電が事業所に対して電気料金を割り引くという制度を作ってくれたので、それに職員が努力をして応えてくれた。今年のように暑い夏でもピークを越えないように冷房を切ったり、努力を重ねてやっと257万円余りを削減した。削減目標とそれを上回っているかどうかの検証がないということだが、大学のような非常に多岐にわたる業務の中でコスト削減の目標を決めるというのは、不可能ではないが現実的には難しい。例えば、コピー用紙を滋賀大学さんと共同購入をしているが、23年度の上期と下期は震災で原材料費が高騰して10パーセントから20パーセント上がっているが、県大も結果的には単価は上がったが2.9パーセントの上昇にとまっている。24年度もその単価で。25年度は単価が少し上がったものから10パーセント下がったという状況である。そういう効果は現れていると思うが、それを目標に掲げていたかどうかといわれると掲げていない。まして震災対応という部分は考えていない。そういう意味では、数字ではなく努力目標に対する評価ということなので、

量の違いに過ぎないかもしれない。

(委員長) ピークカット等を利用して減らしたということは、自然体で減ったということとは違うわけですね。63番の計画に対して具体的にこういう事をやりましたということだが。書き方にもよるかと思うが。

(委員) 目標値がない中では評価ができませんよね。仮に3割削減できたといっても目標値によって違うと思うし、測定ができないと評価は上回ったということはいえないと思う。年度計画の中でカテゴリーごとに目標値を作って取り組まれないと、やっている方もどこまでやれたかが見えない。目標の立て方をもう少し考えないといけないのではないかと。

(委員) センサーとか省エネ機器を買ったわけですね。そういう費用がかかっている節約したということなので、本当をいうとそういう費用と節約とでどうなったか、費用対効果がないとわからない、Ⅳという評価ができないところですか。

(委員) 全体の経費を、電気代とか物品費とかに大きく分けて目標値を作った中での取り組みについて、できた、できなかったという結果を出した方がわかりやすいと思う。

(委員長) 他にございますか。では案のとおりでよろしいですか。

(委員長) では次の70番に移ります。これについて、大学のⅣという自己評価に対して評価委員会の案はⅢとなっていますがいかがでしょうか。

(大学) 大学として広報戦略がすごく大事であることは認識している。具体的には、フェイスブックを既に本格運用しており、ホームページも今年度以降更新したり、中期計画についてはいろいろ考えている。年度計画についても、単純にDVDを作ったわけではなくて、今後内容を容易に更新できるよう、例えば5分刻みの内容をつくり、あまり費用をかけずに更新していける、しかもユーチューブにすぐ載せられるといった仕組みを作ったということで、単にDVDを作ったということではなくてという点でⅣとした。

(委員長) そういったことが書かれていませんが。

(大学) 今年度はフィールドワーク編を追加で作っており、仕組みはできたと思っている。

(委員) せっかく作ってもそれをどこかに発表しなければならない。そこまで含めて作ったということだと思う。書き方の問題かもしれないが、これを読むとそのDVDを放送した以外はほかにやってないように見える。これは当然のことなので、ⅣではなくてⅢだというのが私の思い。いろいろやっておられると思うが、この書き方だと見えてこなかった。

(委員長) 中期計画には国際的な発信とあり、年度計画にも日本語・英語の2カ国語対応版にする  
あるので、びわ湖放送で放送したというのはそれほど……。大学概要を伝えるコンテンツに  
ついては日本語および英語の2カ国語対応としたとあるが、それ以外については2カ国語対  
応していないのか。

(大学) そのとおりです。

(委員) 外国に持って行って使われたのか。

(大学) USBに持ち運べるかたちになっている。6分割中3つ英語バージョンを作った。

(委員長) IVにした理由は、テレビ放送をしたことか。

(大学) 容易に更新できる仕組みを作ったこと。中身も増やしていけるし、時代の変化に対応で  
きるようにした。

(委員長) そのあたりが書かれていないが。

(大学) 今までは30分程度のストーリー型になっていたもので、なかなか見てもらえなかった。そ  
こで5分刻みのコンテンツ化して、見てもらいたいものを見てもらいやすくした。

(委員長) コンテンツ化したことはアイデアとして評価できるが。すべてが英語になっていればあれ  
だが、概要のみでは……。残り3つについては、英語版にする必要がないものなのか。

(大学) キャンパスライフなどあまり英語でなくても分かるものはしなかった。留学生に来てもら  
うための情報の優先度と費用。

(委員) せっかく作った情報発信の媒体の使い方にもうひとつ何かあれば効果が出ると思うが。単  
なる更新だけで終わらなかったというのはわかるが。

(委員) 外国に持って行って見せたのですね。

(大学) 確認はしていないが、外国に行く先生にはUSBで渡した。

(委員) そこで見せて反応がどうだった、留学生が来たというところまで行って初めて高い評価が  
できるのではないかと思う。もしそういったことがあれば、計画以上のことをしたというこ  
とでIVでもいいと思うが、さっきお聞きしたところではIVをつけるのは難しいかなと思う。

(大学) コメントの中に「年度計画の策定を望む」ということが含まれていたら、話が違おうと思  
うと先ほど申し上げたのだが。そうではなくて、評価委員会としては年度計画に対してできて

いるかを見たときに、それほどでもないという判断、つまり量的な判断で評価するという  
ことであれば仕方がない。

(委員長) 事務局、何かコメントはありますか。

(事務局) ここの評価をどのように書くか頭を悩ませた。大学が言われるように、DVDを作成しその  
素材を活かしてBBCでも放送されている。IVを付けるのは計画を上回って実施した場合で、  
これをどのように解釈するのだが、すべての内容について英語版を作ったわけではなく、新規  
作成ではなく更新版ということで計画の難しさがそれほどでもなかったこと、更新版を使って  
何かをしたという部分がそれほどなかったことから、IVは付けにくいと判断した。大学がいわ  
れるように観点が少し違う評価となっているが、今後の年度計画の作り方という逸脱してし  
まうかもしれないが、広報の重要性を踏まえてコメントをさせていただいたもの。ただし、頑  
張って取り組んでいただいたことはコメントとして書かせていただいたつもりである。

(大学) 事務局が苦勞されたことがわかったので、仕方がないかなと感じた。

(委員長) 評価委員会のコメントは修正する必要があると思うが、6つのコンテンツのうち3つが対  
応できているのであるから、概ね順調に実施しているという判断で良いのではないか。なお  
書きを含めてIVというのは、なかなか評価できない。

(委員) テレビ放送は日本語版ですね。

(大学) はい。

(委員長) Ⅲでよろしゅうございますか。大田理事長が気にされていたところは、評価委員会として  
修文とすることによってさせていただく。

(事務局) 評価委員会コメントについては資料3にも同じ文言が出てくるので、事務局素案を修正し  
た方が良いところがあればご指摘をお願いしたい。

(委員長) 70番について、年度計画に対してコメントするのは余計なことかもしれない。DVDの  
内容を6つに分けたこと、そのうち3つを英語版に、3つは日本語版にしているので、概ね  
順調に実施したⅢがっていると思う。

(事務局) その方向で修正させていただきたい。

(委員長) あとⅣやⅡがあるが、これらについて何かご意見はありますか。

(委員) 施設の改修について、県との関係においてやろうと思えばできることなのか。

(大学) 実際にやるとなると予算が伴うこととなる。県立大学の施設は非常に大きい。計画に書いてあるのは、大学の意志としてこういうふうにしたいという要望というか、こうしなければ教育研究に支障が出るということをしてできるだけ詳細に示して、そのことを県に頼むこととなる。施設改修費は設立団体が予算化してくれないと大学では予算をみていない、県でみる約束となっているので、そのことを県に出すまでの作業としてここで書いている。出してから作業は、県が予算部局と折衝してもらおうこととなる。最終形ではなくて、あくまでも大学としてこうしなければならないということで計画に書いている。

(委員) 大学が自主的に作ることはできるということですね。

(委員長) 事務局から説明いただいたときにもあったが、国立大学の場合は各大学が文部科学省に要求して査定を受けることとなるが、県立大学の場合は必ず県を通して交付金が来ることとなり、県の中で大学以外にもいろんな要求がありその中で順位を付けられる。ただし、計画を作っておくことは重要であるということですね。

(委員) 年度計画の書き方を変えなければいけない。進めるとは書けない。

(大学) そのなかで出来る範囲内で少しずつ県と調整しながらやっていこうということで、計画と齟齬を来さないように、手戻りがないように進めるということも年度ごとにやりたいという計画にしている。その大元がまだ出来ていない。大学の自主努力だけでは、いい評価にならない。県の予算が。

(委員) 必要な整備を進めるというのは、ちょっと書きすぎか。

(委員) この場合、財源は全部県から来るのか。大学独自で一部負担するために積み立てていくということはしてないのか。

(大学) 積立制度はしていない。小修繕は大学経費の中で一部みてもらっているが、せいぜい1千万単位の金額。

(委員) 県の予算だけでなく、自分のところで積み立てておいたら進めやすい。

(大学) 積立金制度のことをおっしゃっていると思うが、そういう制度は持っていない。それは県との関係で、退職金と施設整備は県がみるという約束で公立大学法人は運営しているので、積立金制度はむしろ不要。

(委員) 県が賄ってくれるからそういうことであって、でも最近は公共団体でも財政的に懸念されるところがあるので、そういう場合に自分のところということもこれからは必要ではないかと思うのですが。

(大学) 会計制度上もそういうことを検討する必要があるのだろうと思うが、そこに積み立てる原資が元々ないので、目的積立金をいかに積み上げていくかを、評価委員会で審議いただき県に了解してもらう必要がある。

(委員) 県がその分を積み立てられていることはないのか。

(事務局) 積み立てていない。年度ごとの予算。

(委員長) 民間企業と公務員との大きな違い。

(委員) そこが理解しにくいところ。

(委員長) そろそろ予定の時刻になって参りました。本日の議題であります平成24年度の実績評価については、この辺で本日の議論は終わらせていただきたいと思います。ご議論いただいた内容を踏まえまして、事務局で評価結果(案)をとりまとめいただき、次回8月7日の委員会で再度ご意見をお伺いし、確定したいと思います。それでは、事務局から連絡事項等について、お願いします。

(事務局) 長時間ありがとうございました。本日の議論について簡単にまとめさせていただくので、ご確認をお願いしたい。おもに資料2について議論させていただき、素案については概ね適当であるとの意見をいただいた。ただし、5番については評価基準のハードルが高い、63番については削減目標がわかる取り組みを、70番については評価委員会コメントを一部修正するよう意見があった。それ以外に、大学から報告のあった監事監査報告書に関連して監事の役割、位置づけ、あるいは経営協議会のあり方、活用方法についてご意見をいただいたので、大学および事務局それぞれの場面で反映させていきたいと思っている。次回は8月7日14時から今日と同じ会場で開催する。議題は、評価結果のまとめをしていただくとともに、財務諸表等および利益処分についての意見をいただく予定をしているので、よろしくをお願いします。

(委員) ひとつよろしいですか。監事監査報告の中で謝金に関する指摘があった。年度計画の項目別評価のところにはなかったと思うが、それでよいのか。年度計画にないものは何もなかったかのようにしてしまうのか。

(委員長) 24年度になって明らかになったことですか。

(大学) 24年12月に指摘された。資料4の78番のコンプライアンスに関する項目で触れている。

(委員) わかりました。それなら次回に議論すればよいですね。

(委員長) それでは以上で本日の委員会は終了いたします。ありがとうございました。